



消えた街角：富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和34年日本史上最大の慶事だったか、ご成婚式

敗戦に続く占領という、日本史上未曾有の屈辱と苦難に耐えて七年、ようやく独立を果たし、希望に目覚め、復興へ総力を結集していた五十年前、日本の象徴天皇家の「世嗣ぎ」の結婚に、国が沸いた。テレビはあつても大方は手の届かない時代、世紀の式典をこの目で確かめようと、全国から馳せ参じた群衆で、東京はかつてなく華やいた。

そして四月十日、その模様を拝見しようと、私も警視庁屋上で心弾ませお待ちした。待つこと久しお昼前、皇居を出発、二重橋を渡って万歳の声どよめく広場を廻り、桜田門前を通過されるお二人は、にこやかに手を振って、群衆の歓呼にこたえておられた。華麗な馬車列は、さらに桜田濠沿いの道を三宅坂へ進み、東宮へと向かわれたが、その光景はさながら王朝時代絵巻であった。

写真はその後、東京有楽町の朝日新聞本社玄関上に早々飾られた。ご成婚式で正装された皇太子殿下と美智子妃のお姿である。それを観劇に訪れた日劇前の客もうつとりと見上げていた。こうした当時の国民感情を、現世代は理解しにくいかもしれない。

いが、今また、あの頃は貧乏だけど幸せだったという言葉が流布しているように、当時の人情は豊かに通じ合っていた。それが奇跡の経済成長を可能にし、物資を豊かにした。しかし、時が流れ、一方で拝金主義を生み、世界が認めていた日本人の心、思いやり、と、もったいないを駆逐してしまった。そして遂に今、世界中が経済恐慌に怯えている。

しかし思うに、むやみに慌てることはない。むしろここで、日本人が目覚め、誠実と勤勉を蘇らせれば、本来の安定した人間生活に戻れるのではないだろうか。そして世界平和の安定に、中心的役割を果たせるものと信じる。折も折、やがて四月十日が近づけば、五十年前のご成婚式の盛大と、その後の模様を、マスメディアは特集再放送して、日本史上最大の慶事と、国民の熱情を振り返らせてくれるであろうが、現世代にこそ、当時の国民の赤心に触れていただきたい。

(富岡畦草撮影 昭和三十四年四月十三日)

文 富岡畦草(とみおか けいそう)
大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員



(富岡畦草撮影 平成20年12月14日)

上記の旧写真は、共に当時は有楽町を象徴する建物だった。左が日劇(日本劇場)で右が朝日新聞社本社である。昭和56年の再開発によって解体。昭和59年に「有楽町マリオン」として生まれ変わった。それ以降、2000年には同じくシンボリック的存在であった「有楽町そごう」が閉店し、「ビックカメラ」に。2007年の有楽町駅前の大規模再開発によって「有楽町イトシア」が開業した。良質な都市環境が創出されることになるのだが、その反面、戦後を生き抜いてきた建物が失われてしまうのが寂しい。(文:渡辺邦博)

